

席田 九村 那珂

八十一村 東西二郡後復併爲一者、仲哀紀縣是地

早良 五十二村 志摩村五十

喜式等作志麻

推古紀作島郡、怡士六十三村

于穴門引島、天皇美曰伊斗村即此地、仲哀紀云伊觀縣主祖五十述手參迎

伊都魏志作

三

〔筑前國續風土記提要〕總論

むかしは、當國に太宰府あり、帥已下官人多く是に居て、九州二島の政事をとり行ひ、蕃客にも對接せり、故に西の都と稱して、富庶の所なりしとかや、源賴朝卿、總追捕使たりし後、關東の士武藤小次郎と云者、泰衡退治の時軍功あり、その恩賞として太宰少貳に任せられ、筑前、豊前、肥前、壹岐、對馬の守護職たり、其子孫世々少貳と稱、伏見院永仁元年に、鎌倉より探題職を此國に置て、九州二島の政事を司どらしめられしかば、猶いにしへにもをとらぬ繁華の地なりしが、天文の頃、天下大に亂れし頃、九州は偏地なれば亂擾殊に甚し、天正の時に至り、薩摩に島津、肥前に龍造寺、豊後に大友、この三家、鼎のごとく持ちて、國をあらそひ境をおかして、合戦止時なく、中につるて此國は襟衿の地なれば、戰陣のちまたとなりて、諸民居を安くせず、多くは家を出て、山林に身を隠し、侵掠にあふて資財を失ひ、終に壞亂の地となれり、國中にて、少貳、宗像、原田、秋月、麻生の五家大身にて、其家人をわかつて瑞城を守らしめ、各部村を諍ひ、戰鬪を事としてむなしき日なしが、りし所に、天正十五年、秀吉公九州を征伐して、亂を玄づめ治に復し、此國を以て、毛利元就の三男小早川左衛門佐後任中納言隆景に賜りける、隆景天性智慮深くして、よく民をなつけ、衆を撫られしかば、猶亂世に近き時なれど、國中に叛逆なすものなく、四境の内治りて、百姓悅服しける、又廢たるを起し、絶たるをつぐ志有て、神社を貴び、造復せらる、されども國を治ること只八年にして、其養子秀秋にゆづりて、備後の三原に隠居せらる、秀秋天性昏暴の人にて、養父隆景の舊制にそむき、國政正しからず、萬民困みあへり、此由秀吉公聞給ひ、隆景逝去の後、國を沒收し、慶長二年に、そむ